

Niigata Association of  
Nursing Care Research

ニュースレター

第2号

## 新潟看護ケア研究学会 第1回学術集会によせて

新潟看護ケア研究学会 第1回学術集会長

丹野 かほる

平成21年10月24日(土)第1回学術集会を開催することができました。会員の皆様のご支援・ご協力の賜物であります。心より厚くお礼申し上げます。第1回学術集会には214名の参加がありました。当日も大勢の会員およびボランティアの方々の支えがありました。心より深く感謝申し上げます。

特別講演においては、平成20年度の発会式でご講演頂きました川嶋みどり先生に今回もお願い致しました。発会式で提唱された「TE-ARTE(手あーて)」は、本学会の趣旨に通じるものであり、今回の特別講演の演題になりました。川嶋みどり先生をもう一度講師に・・という希望が多く、第1回学術集会においてもお世話になりました。

特別講演の演題は、「看護の進化に向けて一 TE-ARTE (手あーて) を考える」であり、1時間30分にわたり参加者は熱心に先生のご講演に聞き入りました。ご講演内容は、古代看護の歴史に始まり、看護の現場の今に至るまで、看護実践の重要性を歴史的に捉え、看護の真髄は何か?何を進化させるのか?常に看護の原点に触れる講演内容でした。先生のご講演の基盤にあるものは、「看護学は実践の科学である。」ということでした。そして看護の原点とは、「人権・安全性・安楽性をふまえて、その人固有の自然治癒力に働きかけることである。」と定義されました。また、「手」については、母の手、無意識の手、看護職の手など様々な手の種類と特徴についてわかりやすく話して下さい、①触れて感じる、②アセスメントする、③タッチング、④心を伝える等、看護の手としての機能の多様性について説明されました。まさに「手」は看護師の身体を持つ道具性として、看護における安楽の方法性の多様さを発揮するものであることを認識させられ、改めて看護職として自分の「手」がもつ多様性に気づかされました。また、「技能訓練から技術教育」へと題し、技術「わざ」について看護の視点でその重要性や修得の方法について説明されました。最後には、看護の復権と進化について、看護職の手に焦点を当てた研究・実践・研修の重要性を強調され、講演の演題である「TE-ARTE(手あーて) 人間的な有用性を世界に広めよう、そして手当学を構築しよう!」と参加者に熱く語りかけられました。そして「看護の原点に帰る大きな夢を共有しませんか?」と、一人一人に語りかけご講演を終えられました。



今回、川嶋みどり先生のご講演は、本学会では2度目でしたが、アッという間に時間が過ぎてしまいました。ご講演を聞いている間、何度も看護の原点にフィードバックさせられ、看護職の持つ手や看護のすばらしさを再確認致しました。非常に有意義な特別講演で、新たに次の看護に向けて勇気の与えられるものでした。

今回の参加者の中に県内の看護学生43名の参加がありました。授業の一環として計画された教員に感謝申し上げます。朝の開始時間が早いため、上越からでは少し遅れるかも・・・と思いましたが、会場への階段を上ってくる看護学生を見た時、あまりの嬉しさに感慨深いものがありました。特別講演を聞いている時も看護学生の態度は実に立派で、アンケート用紙にも「看護の視点が広がりました」など多くの学習成果を記入してくれました。将来が楽しみになりました。

川嶋みどり先生はじめ交流セッションの講師の先生、遠方からの看護学生、前日・当日のボランティア、仕事のため参加できなかったが看護職や友人を送って下さった方々、当日参加の会員、第1回学術集会企画運営委員、学会理事・評議員・・・実に多くの皆様のご支援・ご協力のおかげで、第1回学術集会を成功裡のうちに無事に終えることができました。心より厚くお礼申し上げます。これからも、どうかこの生まれたばかりの小さな新潟看護ケア研究学会を愛し、支え続けて下さいますよう心よりお願い申し上げます。



**交流セッション A****医療福祉領域における専門家の連携による 21 世紀型コラボレーション  
—知的障害児・発達障害児の「コミュニケーション支援」を例にして—**

講師 林 豊彦先生（新潟大学大学院自然科学系教授）

林豊彦先生は、21 世紀型のコラボレーションとは、「異質な者同士が互いに主張し合い、緊張感を保ちつつ、同じゆるやかなビジョンを共有しながら、創造的に活動する」ことと定義しています。

そのビジョンの下で、専門分野の異なる作業療法士・言語聴覚士の方との 3 人で、共同開発された、『表出障害をもつ人たちのコミュニケーション・言語能力の開発手法の「拡大・代替コミュニケーション」(AAC, Augmentative and Alternative Communication)』を臨床成果の例としてご紹介になり、その具体的なやり方や進め方についてご報告くださいました。会場の参加者の皆様に、その実物をお示しになり、それを直に触らせて下さり、会場から多くの質問がありました。この交流セッションを通じて、今こそ看護師が 21 世紀型コラボレーションのコーディネーターとなると、多くの困難な医療福祉課題に取り組むべき時代であると、林先生は主張されておりました。看護師は、患者様の全人的な健康状態の回復を促進するために、医師や他のコメディカル、さらに患者自身やその家族とも協力してきていますが、従来の業務では医師の指導の下で診療・治療の補助や療養上の世話を行っていた感が強く、必ずしも看護師の能力が臨床で十分には発揮されていないことを課題視しておりました。社会が複雑化・多様化・流動化している現在、同じように疾病も多様化・複合化が進んでおり、複数の専門家のチー

ムアプローチによる長期的な戦略が強く求められています。

従って、各々が目的をひとつにして、専門が異なる人たちが互いの専門知識を少しずつ共有していることが大切で、異文化の哲学・視点を自らに取り入れて、各人が自分の思想の見直しや再構築を図れば、与えられた課題に対して「組織全体として創造的に取り組む」ことができ、患者様の生活の質向上にも繋がっていくことを AAC の開発過程を例に挙げて、先生は力説されておりました。

この様な交流会を通じて、看護分野の中では解決できない課題も、異なる専門分野のもの同士が同じ目標下で、かつ情熱をもち続けて研鑽を積むことで、より高いレベルで解決できる可能性が生まれることを実感し、期待できる有意義な交流セッションとなりました。

(座長 渡邊タミ子記)

**交流セッション B****新人研修に看護療法を取り入れた実践報告****新人研修プログラムに看護療法を取り入れた経緯と病院全体への効果****—看護部代表の立場から—**

南部郷病院看護部長 吉澤浩子

新人看護者（以下、新人）のリアリティショックによる退職をなくし、定着する職場風土を作るために、従来の新人研修を見直し、整備したいと考えた。県新人研修整備事業に応募し、院外の指導者らと「看護師を育てる」職場作りのための新人研修プログラム作りを行った。従来からプリセプターシップを中心とした看護技術チェック（厚生労働省からの「新人看護職員の臨床実践能力の向上に関する検討会報告書」に基づいたもの）を継続することと、他に集合研修を取り入れた。新人が自分なりの自信を持って仕事に取り組める

ように、患者とのコミュニケーションがとれることを目指した「看護療法」と先輩看護者の看護への姿勢に触れることを目的とした「ナラティブ研修」を行った。

また、新人研修整備事業への取り組みで病院全体が「新人看護師を育てる」意識ができ、看護部以外の職員からも指導や励ましだけでなく、事務部長が新人のために食事会を開くなどの支援を受けた。看護部では、個々のスタッフが新人をどう指導したら良いか迷った時に、チームリーダーや師長に相談する姿が増えるなど、プリセプター任せにせず職場全体で「育てる」意識が持てた。新人を育てることは職場が育つことでもある。

職場風土がより改善され、職員が働き続けたい職場として認め合えるように更なる努力をしたい。

## 実態調査の実施と新人のやりがいを育む 「看護療法」の提案

佐久大学特任教授 尾崎 フサ子

新人研修を計画するとき病院の全看護職員へ質問紙調査を実施した。調査内容は、やりがいを感じる時、やる気を失う時、職場を働きやすくするにはどうしたらよいかであった。今回はやりがい感に焦点をあてたのであるが、対象者には新卒者がいなかったため 8 年前に他県で実施した調査結果も参考にした。看護者全体のやりがい感には患者家族からの気持ちいいよと喜んでもらった時、感謝された時のように肯定的な反応を得た時であった。特に新人は患者からの反応が高いやりがい感につながっていた。

そこで、新人研修には「看護療法」を取り入れた。

看護療法は患者の苦痛なところへ「手」がでることと話がしっかり聞ける看護師を育てたいという願いを込めてスタートした新潟大学看護学専攻の演習・実習科目である。研修で実践した内容は、看護者に求められる笑顔、患者が病院の環境になじむように患者自身の話を引き出す回想法、さらに手を使った看護として意図的タッチとオイルをつかったマッサージをペアとなって実践し、体験した。また、手が表情をもっていることを確認してもらうために、相手の背中に 4 種類のメッセージ（励ます、慰める、友達になりたい、嫌いだ）を表し、互いのメモで気持ちの伝わり方を確認した。実施者と受け手の感じた気持ちを照合した結果から手は看護者の気持ちを表すことに気づいてもらった。

手としっかり話を聞くことが新人のやりがい感につながると考え研修を実施した。

## 新人研修に看護療法を取り入れた実践報告 —教育委員会担当師長の立場から—

北日本脳神経外科病院看護師長 羽下 順子

看護部教育委員会が中心となり、新人看護師が「①看護する喜びを感じ、やりがいが持てる、②今、自分ができることを振り返り、自信が持てる」を目標に新たな集合研修を企画した。具体的内容には、看護療法（笑いマッサージと回想法）や先輩の看護を聴くナラティブ研修を盛り込んだ企画をし、実施、評価した。

看護療法研修終了後のアンケートでは、「ほんのわずかな時間（清拭）で自分でもやれること、患者様にとって気分が良くなることに気づけた。」「特別な技術を用いなくても新人でもできる看護があることがわかっ

た。」という回答があり、自分を振り返り自信を持てる部分が出来た。また、ナラティブ研修では「先輩たちの話を聞き、感動した。」「自分もそういう看護師になりたいと思い、がんばれるようになった。」等の記載があった。同じ職場で働いている先輩看護師の振り返りを聞くことで、新人看護師たちは自分の具体的な目標や将来像が持てたのだと考えられる。

今までの、看護技術習得を中心とした新人研修から、看護療法やナラティブなどの精神面に着目した新人研修は、新人看護師にやりがいを感じさせる支援の一つになった。また、新人研修の企画・実施を通して教育委員のモチベーションも上がり、彼らにもやりがい感・達成感をもたらした。



## 新潟看護ケア学会第 2 回学術集会 広めよう、地域につなぐ看護ケア

日時：平成 22 年 10 月 23 日(土)

会場：新潟大学医学部保健学科

学術集会長：渡邊タミ子（新潟大学教授）

一般演題：募集（6 月 7 日～6 月 18 日）

特別講演：村松静子(在宅看護研究センターLLP 代表)

病院から地域へ、医療器財・機器装着患者の実態

～ 今、何がおこっているのか ～

シンポジウム：在宅ケアに生かす専門職の力

### 第 1 回学術集会 アンケートの結果

本学会では、今後の学術集会の企画運営にいかすことを目的に、無記名のアンケート調査を行った。学術集会参加者は 214 人、アンケート回答者 115 人、回収率 53.7%であった。

第 1 回学術集会のアンケートの結果は、プログラム全体、交流セッション、特別講演、演題発表については、「とてもよい」「よい」の評価が多く、概ね良好な結果であった。交流セッションについては、A と B の両方に参加したかったという意見があった。特別講演については、「看護の原点を改めて考える機会になっ

た」「手で触れること、手を使うことの大切さを学んだ」「看護が直面している問題や看護の危機を強く感じた」等の多くの感想が寄せられた。示説発表については、同じ会場で 2 群の同時発表が行われたために、声の反響と拍手によって聞き取りにくかったという意見があった。広報活動については、さらに広報が必要であるという意見が多くあった。また、「ホームページにすぐにアクセスできなかった」という意見もあり、広報活動はさらに検討が必要であるといえる。

今後の活動については、「地元ならではの学会にしてほしい」「いろいろな施設から様々な分野の演題がでるとよい」「今後の発展を期待する」等の期待が述べられていた。

### 新潟看護ケア研究学会第 1 回学術集会アンケート調査結果 n=115

質問項目	とてもよい	よい	より工夫が必要	記載無、あるいは不参加
プログラム全体	46 人(40.0%)	59 人(51.3%)	4 人(3.5%)	6 人(5.2%)
交流セッション*	58 人(50.4%)	36 人 (31.3%)	4 人(3.5%)	17 人(14.8%)
特別講演	89 人(77.4%)	16 人(13.9%)	0	10 人(8.7%)
口演発表	35 人 (30.4%)	55 人(47.8%)	7 人(6.1%)	18 人(15.7%)
示説発表	25 人(21.8%)	36 人(31.3%)	9 人(7.8%)	45 人(39.1%)
広報活動	18 人(15.7%)	58 人(50.4%)	19 人(16.5%)	20 人(17.4%) 内自由記載のみ 6)



\*交流セッション A29 人、B37 人、記載無 49 人

### 平成 20 年度会計報告

平成 21 年 10 月 24 日に新潟看護ケア学会総会が開催され、平成 20 年度会計報告が行われました。審議の結果承認され、収支差額 212,407 円は平成 21 年度に繰り越されます。



収入		
項目	決算	内 訳
1 新潟看護ケア研究学会参加費	△498,000 円	1)一般 3,000 円×150 人=450,000 円 2)院生 2,000 円×17 人=34,000 円 3)学生 500 円×28 人=14,000 円
2 寄付金	49180 円	
合 計	△547,180 円	
支出		
項目	決算	内 訳
1 新潟看護ケア研究学会 発会式開催費	▲250,007 円	1)会場借用料 6,060 円 2)講師謝金 110,000 円 3)接待費・花代 13,942 円 4)通信運搬費 111,925 円 5)印刷費 8,080 円
2 学会公印代	20,630 円	2 学会公印代
3 事務諸経費	▲23,276 円	3 事務諸経費
4 雑費	▲33,210 円	4 雑費
5 予備費	7,650 円	印刷費 第 1 号ニュースレター、 第 1 回学術集会関連資料
支出合計	▲334,773 円	

編集後記 学会 HP は皆さんからのアクセス数が多くなるとネット検索でヒットするようになります。今はデビュー直後ですので、右記のアドレスから直接入ってください。担当:水谷、宮坂、甲田、瀬倉

新潟看護ケア研究学会 事務局  
〒951-8518 新潟市中央区旭町通 2-746  
新潟大学医学部保健学科内 関井研究室  
Fax 025 (227) 2367  
Mail [a-sekii@clg.niigata-u.ac.jp](mailto:a-sekii@clg.niigata-u.ac.jp)  
HP <http://www.clg.niigata-u.ac.jp/~n-nursing-care/>

